

## 春日の地名研究(2)

前回の「十六参り」について補足ですが、宝満山の上宮とは山頂にある竈門(かまど)神社の上宮です。宝満山は御笠山(みかさやま)とも呼ばれ万葉集で有名ですが、標高829mは高校生の登山には格好の山で山頂から眼下に太宰府市、春日市をはじめ博多湾まで多くの街が見えます、今年6月、太宰府国分松本遺跡の「最古の戸籍木簡」発見から判るように弥生から奈良時代へと栄えた郷土が一望できます。太宰府天満宮、天拝山、水城跡、須玖岡本遺跡、・・・日本の古代歴史が見えて来るでしょう。私たちが暮らしている春日市はどんな街でしょうか、まず地名春日について考えてみます。

ご存じのように春日市(古くは春日村)の春日の名前は春日神社からとられた名前と云われています。春日で浮かんでくるのはまず春日神社、春日大社です、また西鉄春日原、JR春日、オードリー春日等です。はるひと呼ぶ所もあります。春日神社の由緒は768年この地春日、に天児屋根命(アメノコヤネのミコト=藤原家の祖神)が祀(まつ)られている事を知った太宰大貳(ダザイ ダイニ)の藤原田麻呂(タマロ)が奈良の春日大社からタケミカツチの命、フツヌシの命、ヒメ大神(アメノコヤネ命の妃神)を迎え神社創建した、とされています。春日大社の由緒にも年代は同じ頃(768年)藤原永手(ながて)が神々を各地から迎えて創建したとあります。また、市内にある春日原(かすがばる)とはカスガの土地の前に広がる野原のことで、筑紫地区では「ばる」と濁って発音する地名が多くあります。

春日の地名はかなり古い地名で「カスガ」とはどんな意味でしょうか、諸説ありますが一例として宮崎康平氏は著書「まぼろしの邪馬台国」の中で“現在の福岡市内に堅粕(カタカス)という地名が残っている、これはカタ(川の田=淵)にカスは御笠川、古くはカスガとも呼んだカス(川の洲)である。”としています。カスガの意味は

御笠川が流れている川の洲の事でしょうか、末尾に「が」つく地名や姓は多くあります、佐賀、山鹿、古賀、春日ですがこの意味については確たるものはありません。フリー百科辞典には霞処(かすみが)、滓鹿(かすが)の掛詞から春日をカスガと云ったとも書いてあります。ここ春日の地は火力の強い赤松に恵まれ弥生時代の窯跡が沢山見つかっています、浦の原窯跡群など多数あり、須恵器(すえき=青灰色の硬い陶質土器)を焼いていたのでこの一帯は煙っていて霞がかかったようだったのでそう呼ばれたのではないかと私は考えています。

(1丁目蒲生)